



遠い国のおはなしシリーズ

あとかたの旋律

苔田 カエル

目次

その後に	19
奥付	
おまけ その 1 : 物語の背景	26
おまけ その 2 : 使用された曲の内訳	28
奥付	32

平和とは なんと不確かなものか
今を 平和と言えるのだろうか
多分 昔に比べればね

人の生きた証などなんと不確かなものか
僕は 生きたという証を立てられるだろうか
多分 人の記憶に残っていればね

全ては幻だったのかもしれない
流れた血を 戻すとしたら
きっと人を殺す代わりに 記憶を消すんだらうね

だって 僕に人は殺せるかい？
だったら 君は 人を殺せるかい？
だけど兵士は 人を殺す

兵士は 無抵抗な人間でも撃つのだろうか？
多分 兵士は 撃つんだらうね
それが戦争だから

でも 僕には どうしても割り切れない
何故 兵士は 青年に銃口を向けたのか
希望しか持っていない青年にだ

平和なんて つくづく 不確かなものだ
永遠に 続くと言い切れるかい
多分 たぶんね

僕は 釈然としないんだ
青年が あまりにも不確かだから
本当に 実在したのかさえ 疑わしい

全ては幻なのかもしれない
青年に起った悲劇は
どこにでも起った悲劇だらう

なのに 何故 僕はこだわるのだらう
否応なしにも 惹きつけられるんだ
どうしても 答えが欲しいんだ

何故 兵士は 青年に引き金を引いたのか
そこで何が 起ったのか
それが 戦争だから？

人はそこまで残酷になれるものなのか
近づいてまでも 撃てるかい？
ついこの前までは 少年だったのに

平和だからと明日も そうだと思えるかい？
例え 予兆があったとしても
恐らく 大抵の人は否定するさ

だって人に銃口を向ける自分を 想像できるかい？
だって銃口を向けられる自分を 想像できるかい？
だったら 今は平和なんだ

こんな小さな村でさえ
山深い猛る理由のない村でさえ
銃声は 悲鳴を上げるんだ

この子が どの子なのか
この人が 誰なのか
昨日 何で喧嘩したか 分るような村でさえ

それでも銃弾の嵐は 吹き荒れるんだ
村の誰が 血に染まると思う
やり切れない涙は 村を溺れさすほどに

それが戦争だから？
だから 人々は 銃を持つのかい？
敵に向かって 引き金を引くのかい？

平和であることが不確かなように
敵だって 虚ろなものだろう
だって隣の人が 君を殺すかい？

理由もなしに 人を殺すかい？
君は 殺せるかい？
僕は 殺せない

だけど 兵士は 殺すんだ
自分は 誰なのか
自分はどこの子なのかを そっとしまって

この子がどこの子なのか
この人が 誰なのか
明日こそは仲直りしようなんて 知る必要もなく

青年にどんな未来が待っているのか
青年に いかなる才能があるのか
青年が どれ程期待されているのか

戦争の前には価値 なんてないんだ
個々の 事情なんて
全ては 敵と言う集合体にすぎない

平和を 誰が乱すのだろうか？
君は 人の不幸を望むかい？
君は人の幸福を取り上げたい？

だけどもともと不遇であったなら
それが 生まれながらの不運であったら
きっと 抗うだろう

それが 不当なものなら
それが 理不尽なものなら
きっと 自分の権利を主張するだろう

それが 不当に得た権利なら
それが 理不尽な幸福だったら
だったら 返すべきなのだろうね

誰もが 悲しい話には 涙するだろう
誰もが 美しい話には 涙するだろう
自分の知らない人のことでさえ

だから 釈然としないんだ
不当は 青年の肉で正すものなのか
理不尽は 青年の血で 購うものなのか 購う あがなう

平和は破られたと どうして知るのだろうか？
降った弾丸の数？
流れた血の量？

こんな小さな村でさえ
小さな掘立小屋の 細い柱にさえ
銃弾の痕は 深く 刻まれている

こんな少ない人口でさえ
同じ時期に死んだ人が 何人もいる
まだ何日も 何年も生きていない子どもまでも

飛び散る血は村を染めたのだろう
教会の白い壁を 照らす夕焼けさえも
血の色に 染めて

飛び交う弾丸は 村を 覆ったのだろう
不寐に 教会のぶ厚いドアさえ 激しく叩いて
輝く星よりも一層 瞬いて 瞬く またたく

神への言葉を 呟いた人にさえ
十字を切った その胸にさえ
弾丸は 突き刺さるんだ

平和であることも 破壊することも
神でさえどうにもならないことなのか？
ならば何を頼みとすればいいのだろうか

青年の非凡な才能は賜物ではないのか？
見出された才能は 運命ではないのか？
頂き物を どうして返せばいいのだろうか

消えるためだけに生まれてくるなんて
儚い まで 至りもしないうちに
ただ消えてしまっていていいものなのか

僕は 釈然としないんだ
ただ 消えて行くだけの才能なんて
意味を失くした一生なんて

集会場に置かれたピアノは
村で唯一の グランドピアノだった
青年に 生きる糧を示した

せめて 僕は 繋ぎとめよう
弾痕の生々しいそのからだを
心を失くした その声を

多分 今は平和なのだろう
また 何時 勃発するか分からないけど
人のことでさえ やり切れないでいるのだから

人目見たときから 手をかけずにはいられなかった
やっと立っているだけの ピアノなのに
弾く人もいない ピアノなのに

だから 一層 惹かれるのかもしれない
未だに放心状態にあって
青年の帰りを 待っているのかと

それは 職業柄なのかもしれない
何台ものピアノを調律してきたけど
これほどまでも迫りくるピアノはなかった

この村も 僕にはとても切ないんだ
どこか ぎこちない村人たち
それでいてとても暖かい

陽気なおかみさんたちでさえ
青年の話には 目を聞わす
聞くのが 気の毒なくらいに

何に 憚るといふのだろう 憚る はばかり
平和にあってさえ青年のことは法度のごとく
人々は 口を閉ざす

だから 一層 僕は知りたくなる
その時 何が起こったのか
当時をよく知る人程 苦痛に歪む

今はまるで忘れたかのよう
もとの 猛る必要のない 静かな村
おびえて暮らす人など もういないけど

襲撃は食料調達のため
飢えた反逆者たちは 山に潜み
小さな村には 賊としか思えない

何のために 銃を持つのか
後戻りのできない 戦いは
もはや 殺略と強奪の繰り返し

どこに終わりが あるのだろう
見いだせないまま
荒んでいく 小さな村

平和な暮らしを忘れた人たち
一番奥まった農家の 惨劇は
次は自分たちの不幸

女たちは 気配を消し
男たちは 猛り
息を殺して 血走った 小さな集落

味方の兵士たちが 村を固めたとして
人々の安らぎは 侵されたに違いはなく
村を横切る際は 雄大な驚さえ 怯えて通る

青年のつかの間の帰省は
ささくれた心を宥めたのかもしれない 宥める なだめる
出口のない闇を照らしたのかもしれない

青年の 見出された才能は
見捨てられたと 諦めた人々に
神の言葉を 呼び起こしたのかもしれない

明日しか見えない 青年に
世界が 広がる程
神の励ましたと 人々は思ったのかもしれない

仮初めの平和だったとしても
きっと 人々は 懐かしむだろう
過ぎてしまった 遙か 遠い昔として

青年にはそんな魅力が あったのかもしれない
遠くなってしまった日々を思い起こさせるような
静かに 心地よく 揺さぶるように

きっと こんな田舎の集落なら
一層 青年の才能は誇りに思えたのだろう
村を 象徴するほどに

青年が 銃弾に倒れた日は
いつしか 青年の才能を惜しみ
供養の演奏が たむけられるようになった

青年が銃弾に倒れた日は
いつしか 村中の戦没者を弔う
村人たちの慰霊の日となった

数々の花束が 墓地を彩る
だけど 不思議なんだ
青年に 供える花を 僕はどうしたらいいのだろう

内戦が終結して
平和の宣言をして
外国人が 訪れるようになった

こんな小さな村にさえ
青年に たむける花を持って
だけどどこに 供えたらいいのだろう

だから 僕は不思議に思うんだ
青年は 本当に実在したのであろうか
しかし 本当に実在したのであろう

花は 集会場のピアノに捧げられる
供養の演奏とともに
決して弾かれることのないピアノへ

鍵盤に散った 飛沫の血の痕
確かに 誰かが 弾いていた証拠だ
僕は 拭き取らずにそのまましておく

誰も ピアノに触ることさえしないのは
青年への 配慮なのだろうか？
誰も 青年のことには 触れようとしないように

戦争があったなんて 今を生きる人には
遠い昔のできごとなんだろうね
平和の中では 忘れてしまうんだろうね

青年のことを知る人も やがて なくなるだろう
埋もれた 住人となって
多くの死者が そうであるように

せめて 僕は ピアノを繋ごう
青年が生きた 唯一の証
飛び散った 血痕さえも

だけど 僕はどうしても 釈然としないんだ
美しい音楽に 癒されることもなく
乾いた心を 潤すこともなく

それとも 心かき乱すような
血が 沸き立つような
そんな曲を 青年は弾いていたのだろうか？

青年は 一体 最後に何を弾いたのだろうか
青年が 撃たれたあの日
あの時に

僕が この村に越してから 久しくなるけど
平和を取り戻して
随分と 世間は変わってしまった

だから 僕は この村に惹かれたのかもしれない
ここはきっと 昔のまんま
以前に戻った 静かな村なのだろうね

望郷の念に似た

そんな懐かしさを 思い起こさせてくれる
純朴な人たちは 遠くで見守っているような

僕は仕事の為に 街に行く
学校 教会 講堂 個人の家だって
呼ばれれば どこへだって行くさ

今日は 老人ホーム
小さな子には 面白いのだろう
鞆の中からは 色々な道具が飛び出して

何時の頃からか 少年が目を輝かせ
僕の事に 張り付いている
学校が終わって いたら連れて行ってやろう

少年の灰色の瞳を 見ていると
願わずには いられない
どうか 平和な世が続きますようにと

小さな子どもには 退屈なんじゃないのだろうか
でも この少年は 飽きることなく
躊躇いもなく 目を輝かす

多分 僕もそうだったのかもしれない
恐らく 誰でも そうだったのだろうね
小さい頃は 見るもの全てが 輝いていて

たたずむ老人たちは 何を思っているのだろう
きっと 遠い昔だろうね
過ぎてしまった 美しい日々だろうか？

小さな子どもには まだ分からないだろうね
遙か彼方をさ迷う瞳の行方は
辛いことも 悲しいことも 思い出であることを

老人は 同じフレーズを 口ずさみ
まるで壊れたレコードのように
飽きることなく 口ずさむ

きっと あの老人たちも 願っているだろう
争い合うのは自分達で終わりにしたいと
平和であることを 嘯み締めてほしいと

目の前の老人は 人を殺したことがあると思うかい？
フレーズに囚われた 哀れな老人だ
だけど 老人も銃を持ったのかもしれない

今は こうして暮らしているけど
隣の人が 敵になった時代だ
目の前の人を 撃った時代だ

「この曲 ご存知ですか？」
囚われの老人の世話する介護士が 問いかけてきた
「ええ知ってますよ」

「弾いていただけますか？」
「僕は ピアノは弾かないんですよ」
何故に 介護士はそれほど落胆するのか

時として 人には魔が差すものだ
介護士が あまりにも純真だったからだろうか
瑞々しい頬は死をも跳ね返してくれるようで

目の前の 囚われの老人は
ちゃんと 知っているのだろうか？
今が平和な世であることを

その瞳は 見えているはずなのに
何も 見ていない
灯を すっかり 消してしまって

多分 魔が差したのだろう
明りを 取り戻そうとして
ピアノの前に 僕は座っていた

自分が上手に弾けるのかなんて
これっぽっちも 心配しないで
まるで 当たり前のように

老人の 口ずさむフレーズを
埃がかった記憶の中から
僕は その曲を 弾き始めた

聞こえているだろうか？
届いているかい？
ゆっくりと それはとても 表情豊かに

もしも意識を持って 見たとしたら
この囚われの老人には どう映るのだろう
この平和な装いは

静かに 切ないピアノの音に
近くにいた老人たちも 耳を傾ける
灰色の記憶に色をのせるように

それは そっと 知らず知らずに
思い出の中に 沁みて行く
ああ 僕には感じる

この手が 曲を奏でることのなかった手が
本能を追って 動くほど
囚われの老人の意識が 開いて行くのを

眩くように 囁くように 問いかける旋律は
何を思い出させているのだろうか
小さく 迫るように 揺さぶりながら

囚われの老人が 口ずさむ
遙か 彼方の夢見るように
思い出を なぞって

幸せな思い出に夢現なまま 終わったなら
囚われの老人もおぼろげでいられたかもしれない
やっと得た平和の行方は誰にも分からないように

急激に 引き戻された現実
それとも やるせない思い出に 引き込まれたのか
一瞬の覚醒が 老人を覚めさせた

「やめろ！ やめろ！」
囚われの老人の怒号が 沸き立った
立つ意思のなかった足で立ち上がって

しかし 僕は 弾き続けた
確信を持って 尚も 弾き続けた
悶え喘ぐ老人を 置き去りにして悶える もだえる 喘ぐ あえぐ

踏み出した音は駆け上り遂に 登り切った
「やめろ！ やめてくれ！」
老人は天を仰いで 絶叫した

持ち上げられた拳は 悲鳴を上げ
やり場なく 天を 叩いた
「もう やめてくれ！」

このような状態の責めは 誰が負うのだろう
卒倒した老人の責めは 誰が負うべきか
平和とは 一瞬として騒然となるものだ

だけど 僕は 揺るぎない確信を得た
高鳴る鼓動を どう 落ち着かせよう
逃げるように 僕は立ち去った

少年を 伴っていなければ
僕は行き倒れていたかもしれない
息が止まりそうなほどの衝撃で

囚われの老人は 兵士だ
青年を 撃った
あの 兵士だ

僕は どこに たむけたらいいのだろう
青年のための 花束を
納まりきれない 動揺を

僕は 集会場の天井を 仰ぎ見た
ピアノの上には 無数に残る弾痕
鍵盤の上には 青年の 血痕

僕らは どう平和を保てばいいのだろう
しばらくして あの介護士から 連絡がきた
あの囚われの老人は 亡くなったと

あの曲をたむけてくれと 頼まれた
勿論 僕は 断った
しかし死をも跳ね返す若さは 魅惑的だ

強引なお迎えには断りきれず
少年のお供は 若い娘への配慮で
僕は言われるままに 車に乗り込んだ

その後 囚われの老人は
願うように 詫びるように
あのフレーズを抱いて召されたという

「あの方は 戦争で奥さんとお腹の子を亡くしました
奥さんは 敵対する民族の娘で
結婚する時は それでもまだ平和で

しかし彼は 反乱軍に身を投じ
奥さんは 敵の砲弾にあい
お腹の子は 味方の少年達に殺されました」

戦いの始まりは どこからで
何時の間に 平和になったのか
老人の戦争は まだ 終わってなんかいないのに

もとは混在していた国であったものを
誰が敵で 誰が見方なんて
混血だって 珍しくないのに

誰が戦いを始めたのだろうか？
しかし 全てを愚かなことと言い切れるだろうか？
不当は そのままでいられるはずがないのだから

「あの方は 長く精神病院にいらっしゃいました
小さな村で捕えられ我を失くしたそのまま
最近 あのホームに移されたのです」

陽気な床屋は 志を持って 銃を取り
砕かれた希望は 囚われの身に 自らをつなぐ
同じフレーズを口ずさんで

僕は どう 落ち着かせよう
あの老人も また 戦争の犠牲者
どこにでもあった悲劇と 憐れもう

囚われた兵士は やっと 解放されたのだろう
どうぞ 安らかに
死をもつての 終の平和 終 つい

僕は ゆっくりと 指を 鍵盤に落した
あの日 青年が弾いていたのはこの曲だ
そして その時 兵士が聞いたのは この曲だ

郷愁を帯びた とりわけ 感傷的なこの旋律は
兵士の心を捕らえたに違いない
静かに 緩やかに 締め付けるように

青年は あと 何日もしないうちに
戦争のない国で 思う存分学ぶはずだった
どこまでも開かれた世界を 見つめて

しかし 一端の帰省で見た 故郷の光景は変貌し
一面に広がる緑さえ さめざめしく 震えるあがり
祖国を去るにはさぞ 忍びなくあったであろう

だから 一層 青年は故郷に思いを寄せて
そして 兵士は 魅せられたに違いない
血にまみれた 逃げ場のない日々の中で

記憶を 探るように
平和だったころの
輝き放つ 思い出を求めて

兵士は 思い出していたに違いない
青年が淡い恋に抱擁するように
接吻する頬の はにかむ妻の温もり

青年には 未来しかないように
若い夫婦も また 喜びを待ちわびて
それが 当然であると信じて

全てが祝福に満ち満ちていた日々
囁くように 促すように
生れるであろうわが子に 呼びかけて

小気味よく揺れるブランコのように
青年は 何時もよりも 甘く 優しく
兵士を 心地よく 揺すったに違いない

もし 青年がここで止めておいたら
兵士は 代えがたい幸福な時に酔いしれ
思い出を湛えて 去ったであろうに

しかし 青年は尚も 弾き続けた
故郷への思いを乗せて 鍵盤に刻んだ
夫婦の平和は 既に 砕かれたとは知らないで

兵士は破壊の足音を聞いたに違いない
何故に 妻が殺されたのか
尚も 果てた母から わが子が引きずり出されたのか

ただ不当な待遇を 正したかっただけなのに
高い志は 望まない殺し合いに
誰を呪えばいいのだろうか

追い詰められた兵士は
遂に 発砲した
いや 引き金を引いたのは 青年だ

青年が 魂を込め 魂 たま
入念に 狙いを定めて
打ったのだ！

何に？
理不尽な 殺し合いにだ
兵士は 床屋は それに 共鳴したにすぎない

どうか 安らかでありますように
戦争の痛手さえも癒え
平和でありますよう

小さな子どもには退屈なんじゃないだろうか
しかし 飽きることなくハンマーを追っている
少年は メカニズムを 好むものだからね

演奏を聴く中に 多く涙する老夫人を見つけた
老夫人には どんな思い出が過っているのだろうか
僕は 漠然と思っていた

人よりも 多く涙する 女の子
淡い思い出を 青年とともに 紡いだだろう
青年にも きっとそんな特別な娘がいたに違いない

「お上手ですね」
介護士が 褒めてくれた
「よく弾かれるのですか？」

「いいえ」
僕は 旋律を認識できない
音を きくだけ

送ってくれる 帰りの車は
朴訥として 申し訳なく思えた 朴訥 ぼくとつ
緩やかにのぼる平和な風景を眺めて

介護士は 僕たちを置いて帰って行った
不思議な余韻を 残して
思いもかけない人との出会い

もう直ぐ 村の慰霊祭だ
そろそろ調律をしよう
未だ 青年の夢を見ている ピアノの

「坊主 面白いかい？」
少年は 余すことなく 目を輝かす
「こいつの面倒 見てくれるかい？」

少年は分かっているのか 頷いた 頷く うなづく
僕は これが最後かもしれない
来年の自分は ここにはいないかもしれない

名残惜しく 残念にも 思うけど
いつかは去らねばならないのだから
ここまでいられたことに 感謝しよう

あの日も このように 暑かったのだろうね
長い夏休みが明けたら 青年は よその国に
平和にあってこそ開け放たれた窓

みな 戸を固く閉じ
じりじりとした 汗をたらして
銃声が 鳴り止むのを待っていたなんて

「夕べの大雨で 土砂崩のため 列車が不通です
今年は 学生さん 来られないかもしれません」
知らせが入った

演奏は 音楽学校のコンクールの優勝者で
僕は何時も聞かずに 教会にだけに出向いていたが
あけっぴろげな小さな村には 響き渡った

演奏会には行ったことはないけれど
ないとなると とても 残念に思えた
特に 最後になるかもしれない 慰霊祭だけに

しかし 何故だろうか 僕は 駆りたてられた
締め付けられるほどの衝動に
青年を 独占したいという 欲求が

平和に保障なんてあり得るのだろうか？
僕には 実感がないんだ
青年の存在に 取り留めがないように

僕は 感じたいんだ
青年が 実体のあるものとして
確かに存在したということを

青年と歩んできたピアノに

僕は 探るように 指をおろした
まるで この時をずっと待っていたかのよう

青年も きっと こうして
まだ 漠然と広がる 未来を追って
音に 託したのだらうね

秘めていた思いを そっと 耳打ちするように
静かに 篤く 僕に 語りかける
音を 奏でるほどに

身も だえするほどの 震えを感じた
零れんばかりに 溢れ出る 感情を
身体全体で 受け止めて

どうか 壊さないでこの平和を
どうか 邪魔をしないで 僕の夢を
どうか見放さないで 僕たちを

初々しい 青年の思いが 蘇った
何度も 失敗を重ねた 悔しさ
初めて 美しく重なった 喜び

錆ついた身体は 何時もは 怠惰なのに
武骨な節は 何時もは ぎこちないのに
何時も 無愛想な 感情も

難解な調和は 僕を 目覚めさせていく
血が 熱く 全身に漲って 漲る みなぎる
魂が 遂に 弾け飛んだ

覚醒された 僕の 記憶
何故に 村人たちは 口を噤んだのか
どうして 青年の墓は ないのか

この子が どの子で
あの日 何が起こったのか
みんなが 知っているような村だ

平和を どうして 作ればいいのかろう？
きっと一人一人が 寄り添いあって
許しあって できるものなんだろうね

何度も弾いた この練習曲
あの娘が好きだったんだ
だから もっと 綺麗に弾こうと

僕は知っている
死をも跳ね返すような 瑞々しい頬を
他の子より 多く涙した あの娘の頬

流れた血を戻すとするなら
床屋は 自らをつないで
僕は 記憶を消した

全ては 僕への 配慮 だったんだ
僕の傷に触れないでいてくれたのは
やっと 帰ることができた

永遠の 故郷に
一番美しい時代の 青年の思い出に
君に 捧げよう この曲を

お前には身に余るって」

「あれは 留学が決まった夏休みの帰省だったわ
あの日も 襲撃があって
みんな息を潜ませ やり過ぎたの」

もう 大丈夫 と思ったのね
彼は 何時ものように 集会場に行き
練習を 始めたわこのピアノで

神様は 残酷だわ
兵士が まだ残っていたなんて」
老夫人は 涙で 声を詰まらせた

「後 何日かで ここを出るはずだったのよ
なのに 弾は彼の頭を 射抜いたの
すぐ 町の病院に運ばれたけど

わたしは 死んだものと 聞かされていたわ
わたしの家は親戚を頼って 外国に疎開したの
その前に お見舞いに行ったけど

最後に見た彼は まるで死人のよう
わたしは残るって 泣き崩れたけど
許されなかった」

老夫人は 涙でぬれた頬を 老人の頬に寄せた
「こんな粗末なピアノで」
老紳士が 労るように ピアノを撫でた

「彼は 腕を磨いたのだね」
若い娘は 老紳士を伺うように尋ねた
「この方は 一体 どなたなのですか？」

「彼だよ」
老紳士の示す先には 写真が掲げられていた
青年の姿の モノクロの写真が

若い娘には 直ぐには呑み込めなかった
ただ 呆然と するだけで

遠く写真の青年に 目をやった

「わたしが もっと早く来ていれば
連れ戻せたかもしれない」
老紳士は悔しそうに 写真を見た

「わたしは どれほど彼に嫉妬したことか
死んだと 聞かされた時は
どれほどまでも 恨んだことか」

「こんな田舎にこんな天才が生まれるなんて
わたしは 彼の全てに 嫉妬したよ
わたしの尊敬する先生に 見出されたのだからね

先生は 帰国してたんだ
晩年は 祖国の教育に捧げるつもりで
そんな先生と 彼とが 出会うなんて

先生は また大学に復帰してね
待ってたんだ 彼が来るのを
彼への指導を 楽しみに」

「よき親友に なれたはずなのに
君は あの時のまんまだ
まるで時間が止まっていたかのよう」

老紳士は ゆっくりと歩いて行った
青年の血痕が残るピアノの 向かいに
向かいには 演奏用のピアノがあった

「先生いらしてたんですか？
すみません 遅れてしまって」
演奏用のピアノの前に 学生が 立ち尽くしていた

何時着いたのか 学生も また 呆然としていた
老紳士は 学生の肩を軽く叩いて
演奏用のピアノの椅子に 腰かけた

そして 力強く 鍵盤を捕えた
静寂の眠りを 打ち破るかのよう

過ぎた日々を取り戻すかのように

老夫人は老人の名を呼び 一層 抱きしめた
「神様は見放さないでいて下さったのね
今日の この日に わたしを導いて下さった」

若い娘は 老夫人の肩にそっと手を置いた
「はじめて この方のピアノを聞いた時
何故だか わたし 胸が つまされました」

老夫人は 頷いた
「あの時 直ぐに分かったわ 彼だって
だって 淡い思い出を一緒に紡いだのですもの」

「おじいちゃんどうしちゃたの？」
「長い眠りに つかれたのよ」
老人は村人たちの手により 教会へと運ばれて行った

流離の老人の旅が 終わった 流離 さすらい
果たして我を忘れた老人の人生に
なんの意味も なかったのであろうか

老紳士は 永遠の友を 見送った
老人を慰撫するかのように
安らかな眠りに 誘うように 誘う いざなう

青年が確かにいたといことも
老人が生きたという証も
小さな村は 忘れないであろう

灰色の瞳の中に 何時か見た風景として
その肌に感覚として
耳に 余韻として

年を重ねた少女は眠るのだろう
燃えるような密かな思いを
そっと胸に抱いて

そして 人々は 感じるだろう
それぞれが持ち合わせた 哀しみを

美しい旋律の中に

『僕は 釈然としないんだ

不当は 人々の肉で正すものなのだろうか？

理不尽は 人々の血で購うものなのだろうか？』

奥付

おまけ その1：物語の背景

★マキシム・ムルヴィツァ：1975～クロアチア人 ピアニスト
鍵盤のプリンス 1990年 クロアチア紛争勃発。

戦火の中、地下室でピアノの練習。

ニコライ・ルービンシュタイン国際コンクールで優勝。

モデル並みの容姿に奇抜なファッションで有名。

あの若さで、戦争を体験。

しかも、激しい戦火の中、生きる望みをピアノに託し、

地下で練習を怠らなかったという。

話を聞いた時には、驚愕した。正に、戦場のピアニスト。

物語は、マキシム氏について書いたものではないが、ヒントにはなった。

★民族紛争

紛争の原因は、多様であるが、要因の一つとして、

多民族国家で、国民国家の概念の考え方が起こり、他民族排除へと傾き

民族間での争いが勃発。

物語は、どこの国という訳ではないが、色々な紛争地帯を参考にした。

複数民族が入り混じる国家で、主人公が暮らすのは小さな村。

同民族が居住する区域で、また、主人公は多数派でもあるので、

あまり緊迫感はない。

以前は、多民族間でのいざこざは多少あったものの、混在して暮らしていた。

しかし、国家としての意識が高まってくると、民族の意識も高まって行った。

少数派は、居住区を決められたり、重要な要職に携われないなど、

理不尽なことが多く、当然、反発。そして、遂に、爆発、紛争へ。

どんどん、激化していくうちに、遂に、青年の住む村まで襲撃が。

★青年

音楽教師に才能を見いだされ、街の音楽学校へ入学。

音楽学校でも、国際コンクールで優勝するなど頭角を現し、

内戦が激化する最中、音楽大の奨学資金を受け留学が決まる。

10月から入学が決まり、夏休みの村に帰省中、襲撃に遭う。

青年の死を惜しみ、何時からか、青年が銃弾に倒れた日に、追悼演奏が行われる。

★青年の謎

銃弾に倒れた日、青年は何を弾いていたのだろうか？

そして、青年の御墓はどこに？

おまけ その2： 使用された曲の内訳

★ノクターン（夜想曲）第20番 嬰ハ短調 遺作 フレデリック・ショパン

lento con gran espressione（ゆっくりとても表情豊かに）

1830年、姉のルドヴィカが、ピアノ協奏曲第2番を練習する為に作曲。

パターン A-B-A' で構成。

A：1～20

B：21～46 ♪ 21～24 ピアノ協奏曲第2番

30～33 歌曲：乙女の願い

33～34 ピアノ協奏曲第2番

45 ゆっくりとかけ上がる ⇒ 陶酔

46 ソ PPP(右 休符(左 ⇒ 幸せだった日の思い出をしまう

A'：46 ♪～65

兵士の心理状態

A：音を聞きつけ兵士が入ってくる

B：⇒ 兵士は思い出にふける（追憶）

A'：46 長い休符後 ソ→ソと1オクターブ上がり tr

⇒ 現実へと引き戻される

4 8 ド→ド1 オクターブ上がる

4 9 ド→レ下がって ミ#早く下がって頭ドレは 印象が強烈

⇒ 封印していた記憶を引きずり出されて 追い込まれる感じ

やめろ！ 叫びの始まり

5 2 ミ tr ⇒ 頭が揺さ振られる感じ

5 3 ファー気にかけて上がる ⇒ やめろ！ と

右ファ→左ファ ⇒ 天井目がけて打つ

5 4 ミレド#レ#ド appassionat (熱情的)

5 5 シラㇿまでクリアに音を鳴らす ⇒ ラㇿで青年の頭部に当る Σ♪!

>ソレ 余力で音を残し 青年は床に倒れ落ちる

兵士は、理不尽な牢獄へと自らをつなぐ

奏者の解釈により弾き方が随分違うので 物語にあった弾き方を以下に記載。

たっぷりと 気持ち感傷的に 弾きましょう。

B は夢見るように 甘く 美しく

スタッカートはよくきかせて特に3拍子のリズムは美しく

A' 4 9 は頭ドレからシラソファとミ 転げ落ちる様を表現しましょう。

5 4 は ミが際立つように レド 5 5 シラとはっきりと楽譜通りに

★エチュード (練習曲) 10 第3番ホ長調フレデリック・ショパン

別れの曲

1832年、作曲。

「かつてこれ以上きれいな旋律を作ったことはない」と言ったとか。

主人公が最後に弾いた曲。

パターン A-B-A ♯で構成

A : 1-2 2 美しい旋律

B : 2 2-6 1 強弱 左右バランスが複雑そう

⇒ 記憶がだんだん蘇る

A : 6 2- ⇒ 思い出す

★ハンガリー狂詩曲 フランツ・リスト

1853年に15編が出版。そのうちの第2番を使用。

ハンガリーの民謡と思いきや勘違い、ロマの曲で、それを元にして作った。

老紳士が、慰霊祭のたむける曲として演奏。

★慰め フランツ・リスト

1849～50年作曲。6曲で構成。そのうちの第3曲使用。

老紳士が、老人のお葬式に演奏。

全曲演奏してもよいが、ほぼ15分と長いので、

どれか一曲といわれれば、第3曲がいい。

ショパンは練習曲10番をリストに送ったという間柄。

ショパンとリストの関係から言うと、

最後に、たむけられる曲は、リストの曲が相応しいのかも。

では、リストならどんな曲がいいだろうか？

最初は、『亡き王女のためのパヴァーヌ』1910年、ラヴェル編曲。

がいいと思った。理由は、単に好きな曲だし、静かに送ってやろうと思ったから。

最後にして、やっと、自分の居場所を見つけたような、

主人公の人生の最後には、相応しいように思えた。

どっちにするか、最後まで、すっごく迷った。

結果、リストの『ハンガリー狂詩曲2』に決めた。

理由は、主人公と老紳士は、机を並べることはなかったが、

お互い意識しながら、同じ道を目指していたのだから、

きっと、老紳士は、自分の腕前を披露したいと思うだろう。

その道で成功した老紳士は、青年の死を知らされたとして、常に意識してきたに違いない。

たむける曲を演奏する中で、競い合った青年との思い出が過ったに違いない。

それであるなら、しめやかな曲よりも、躍動するような快活な曲が良い。

ハンガリー狂詩曲2は、かっこいいし、弾きごたえも聞きごたえも申し分ない。

個人的に、自分は、リストと言えば、『ラ・カンパネッラ』だが、

この曲は、とてもきれいな曲だけど、いかにも翻弄されている感じがして、

主人公の人生と照らし合わせた場合、痛すぎる感じがするので、やめた。

老紳士が送る最後の曲に『慰め3』を。

後からたした。この曲も、『ハンガリー狂詩曲2』と『亡き王女のためのパヴァーヌ』と

大いに悩んだ。慰め3は、慰霊祭の曲にしては弱い。恋人に送るのにはよいが。

しかし、ここで捨ててしまうのもたいたない。

とても綺麗な曲なので、ラヴェルではなくリストを選んだことで、

ここは思いっきりよく。と思い、お葬式で使うことにした。

要は、自分の好きな曲をたむけて下さい。

奥付

遠い国のおはなしシリーズ あとかたの旋律

(初版：2013. 8. 1)

<https://puboo.jp/book/74416>

著者：苔田カエル

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/keronojyou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/74416>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74416>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

遠い国のおはなしシリーズ あとかたの旋律

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
